

著者プロフィール
田中俊光（たなか・としみつ） 1979年東京都生まれ。2002年、日本大学生物資源科学部卒業。大手住宅メーカーのグループ会社で外構造園専門部門に勤務し、転職後は造園・外構に加え住宅のプランニングも手掛ける。2013年3月に独立し(株)ナインスケッチを設立。雑木の庭をはじめ、エクステリア・外構のプランニング・施工管理に携わる。主な受賞歴：2011年、「ユニゾン フォトコンテスト2011」ファサードガーデン部門ゴールド受賞、2014年、「浜名湖花博庭園コンテスト」浜松市長賞受賞、2014年「第2回ブロックガレージデザインコンペ」入賞、2017年、三協アルミ「エクステリアデザインコンテスト2017」ファサード部門 ゴールド受賞。資格：一級造園施工管理技士、一級土木施工管理技士、エクステリアプランナー1級、二級建築士。



写真2 表層の露出、乾燥、崩壊、倒木が観察できる



写真1 斜面法尻にコンクリート擁壁が設置され、ここで土中の空気を溜め込み空気が抜けなくなっている

自然は常に基の環境に戻ろうとする

前は、地球環境を4つの環境分類と8つの環境ファクターから見えてきたが、今回は具体的に、今の環境はどうなっているのかを見ていきたいと思います。

写真1の山は、倒木や地形が崩壊しているのが見られます。また、表層の土が露出し乾燥して林床が衰退しているのがわかります。明らかに不健全な山だと感じられます。これは、人による林道の開発が原因だと考えられます。

もう少し具体的に見ていくと、大気の大気は本来、吸い取られるように地中に入って植物の根を媒体として動き出します。しかし斜面法尻にコンクリートがあることで、空気の動きが止まってしまいます。ここで空気が止まると、雨が降っても、その水はなかなか地中に入っていくことができず、雨が降る度に表層を叩いて泥水を流出させ、コンクリート際に泥アクを貯めて、表層にある無数の通気孔を詰まらせてしまいます。ここが詰まるだけで空気流が止まり、中に空気がこもり、抜けなくなってきました。すると、雨が降る度に水が表層に浸透した分だけ水圧と土圧が掛かってきてしまいます。コンクリートがあることに

より空気が抜けなくなり雨が降る度に圧が掛かり続け、土は締められ硬くなってしまふのです。締まって硬くなった土には、水はさらさらに浸透しなくなり乾燥化してしまいます。単純なちよつとしたきつかけがものすごい負の連鎖を引き起こしているのです。

そうなった山の土は軟らかさが失われ、微生物も小動物も生息できなくなり、樹木の根も伸ばすことができなくなり、呼吸できるように働くのです（写真2）。呼吸できれば微生物や小動物も生息でき樹木の根も張れ山はまた安定してきます。自然は常に基の環境に戻ろうとしているのです。言い換えれば、山は苦しくて呼吸できないから土砂を崩して呼吸しようとしているだけなのです。呼吸できなくなっているのは为什么呢？

コンクリートです。コンクリートをつけたのは誰かと考えると・・・。都合の空間づくりが自然を傷め続けているのです。

では、健全な山はどうなっているか見てみましょう。写真3を見ると、大地の表面は斜面でも風に飛ばされることなく水に流されることなくしっかりと落ち葉で覆われています。落ち葉の層を少しめくってみると（写真4）、樹木の細根や菌糸が張り巡らされて、ネットワークを組みしっかりと落ち葉を捕まえているの



大地の再生

連載

造園家 田中俊光
(株)ナインスケッチ代表)

山は苦しくて呼吸できないから、土砂を崩して呼吸しようとしているだけなのです。



写真4 落ち葉をめくると樹木の細根や菌糸が張り巡らされている



写真3 斜面でも表層は落ち葉など有機物で覆われている

がわかります。これは、水脈機能がしっかりと整っているからとも言えます。葉っぱや枝などの有機物が表層にあることで無数の通気孔が泥アクなどで詰まることなく、大気の空気はしっかりと地中に入り谷へと抜けていきます。雨も表土を叩くことなく有機物で浄化されながら地中へ浸み込んでいきます。このように空気と水の循環が生まれることで生き物たちの呼吸の循環もはじまり、植物たちも根を伸ばし、プラスの改善の連鎖が生まれ出していきます。

庭や外構の問題を解決するためには？

これらの自然環境のメカニズムをミクロの問題として大切に見ていけばマクロへの対応がわかってくると思います。空気の循環をしっかりと考えることで、庭や外構での問題も解決できると思えます。庭の水はけの問題や木々の成長や病虫害の問題など対応が見えてくると思います。

自然環境の中から見れば人の住まい環境は点のようなミクロの世界です。そこで建物を建て駐車場や塀を作ること、その部分は通気不全を起こします。それが住宅地、道路網の開発などさらに広がって見ていくと影響は計り知れませんが、住まいをつくることで自然環境は傷み、災害などを引き起こし、我々の暮ら

しにも影響が出てくる可能性も考えられます。私たちの業界は、人が住みやすく快適に暮らしやすいために外部空間を提案していますが、それが実は、廻り回って自分たちの暮らしに影響を及ぼしているかもしれません。

戦後、高度成長期から始まった莫大な費用を掛けた開発は、水のことは考えていますが、大地の中の空気の処理が放置されています。そのため自然環境が傷んでしまいました。自然のシステムを理解せずいつのまにか、自然を超えて人が先に行ってしまう、自然を力で抑えつけ人優先の空間づくりが進み、結果、今のような環境をもたらしたと思います。

これからは、自然に寄り添った暮らしや空間の提案をし、住まいを作っても環境を傷めない、むしろ改善されるような空間づくりの時代になればと願います。それは、提案する側だけでなく、住む側の人の考えも変わらなければ難しいことです。

しかし、我々の業界は土を扱える仕事です。みんなが提案する住まいの土中環境をしっかりと考えていけば、点から面へと広がり地域単位で心地よく安心できる暮らしが実現できるのではないのでしょうか。そう考えるとこれからの外構や造園業界の責任は大きく、また自然環境を改善することに繋がる仕事だと考えると夢が広がります。

連載の目的

執筆者の静岡県浜松市の造園家・田中俊光さんは、長い間、造園・エクステリアと建築、まちづくりの融合を考えた「空間づくり」を実践してきた方です。田中さんの作る「雑木の庭」は、単に鑑賞する場所ではありません。その場にいると、不思議と「人を快適にさせる」空間でもあります。

しかし、中には、どうしても植栽が枯れてしまう場所もあります。どうしてなのか？一田中さんは現状に満足しませんでした。その中で「大地の再生」という考え方に会いました。そして探求を続けていくうちに、日本の住宅のほとんどが、雑木が枯れてしまう酸欠の土壌になっているのでは？という疑問を抱くようになりました。

果たして、現在の住宅業界、そして造園・エクステリア業界に、そうしたメッセージが受け入れられるのか。少しでも快適空間の創造に貢献できる業界にしていければという思いで、新しく連載を引き受けて頂きました。ぜひとも、この連載を通じて、これからの日本の国土のあり方について、造園・エクステリアの観点から貢献出来ることを一緒に考えて頂ければ嬉しいです。